

源氏物語における「そら」の恐懼について

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009941>

源氏物語における「そら」の恐懼について

山崎 和子

はじめに

源氏物語第一部の藤壺と源氏の密通事件は、物語全体に関わる重要な構想を提示するものであった。藤壺との叶わぬ恋が、第二部の柏木と女三宮、第三部の浮舟と匂宮の密通へと変奏され描かれていくが、これらの密通者において仏教的な罪障意識の希薄なことは、野村精一氏^{〔注1〕}などによつて指摘されてきた。そしてそれに代わる罪の意識として論じられたのが、「そら恐ろし」「そらも恐ろし」といった「そら」に関わる恐懼である。藤壺には「そら」に関わる恐懼の表現として次の二例がある。

- 1 いとどあはれに限りなう思されて、御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものを思ふこと隙なし。(若紫① 233)
- 2 いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、玉の瑕に

思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。(賢木② 116)

今日の注釈書では、『新大系』は1注なし、2「空から見られているようで恐ろしい意。右大臣方専横の状況である」、『新全集』は1「空から見られているような恐懼。帝が、藤壺懷妊に感動して手厚くもてなすと、かえつて藤壺の恐懼はつふる」、2現代語訳で「誰かに見られているように恐ろしくお感じになるからであった」と解している。

ここでは「そら恐ろし」は「空から見られているような恐懼」と把握されているが、従来「そら恐ろし」は「何となく恐ろしい」と捉えられていた。その語義把握を最初に訂正されたのが、松尾聡氏^{〔注3〕}である。氏は、「そら」は接頭語ではなく、『空〓天』という実質的な意味を持った名詞^{〔注4〕}であり、その語義は、

「空の目が恐ろし」(人間の目は覆えても天の目は覆えなくて恐ろしい)が原義であり、その「空(天)」の目は、「人

間を超える存在↓造物主・神・仏」の目でもある。

として、「心やましさ（罪意識）によってひきおこされる恐怖感」を表す語であると捉えられた。

今日、従来の成果を取り込んでいるかのようにも見えるが、近年の『王朝語辞典』（二〇〇〇年東京大学出版会）では「そら恐ろし」の「そら」は「内実のない意」を表す接頭語として扱われ、『源氏物語事典』（二〇〇二年大和書房）でも、

自分の犯した罪などがなんとなく恐ろしい、の意を表す。

∴「そらおそろし」の「そら」は、秩序・正道を象徴する「天眼」の概念に通じることから、隠しきれない罪の自覚、また罪が露見する事態に対して恐懼の念を抱く場合に用いられる。単なる恐怖感を超えた、ある種致命的な要素を含んだ語といえる。

と述べるなど、未だ十分とは言い難い点も残る。

「そら」と形容詞の接続する「そら恐ろし」「そら恥づかし」は、前述の松尾氏などによって現存の文学作品としては源氏物語が初見であるとされる。源氏物語以前の文学作品が、密通や深い自己の罪意識を扱うことがなかったとしても、それが源氏物語を嚆矢とするのかは明言できないとしても、源氏物語において「そら恐ろし」「そらも恐ろし」など「そら」に関わる恐懼を言語化し、形象化したのである。前述注釈書における「空から見られているような恐懼」とは、松尾氏の捉えられた「人間を超える存在」としての『空（天）の目』に対する恐怖心を言うのであるが、右例において藤壺は、明らかに「そら」そのものに恐懼している。「そら」に関わる表現を検討し、その

恐懼の内実を考察してみたい。

一 源氏物語の「そら」に恐懼する例について

源氏物語中の「そら+形容詞」は、「そら恐ろし」5例「そら恥づかし」1例である。

- 3 女、身のありさまを思ふに、∴常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方の思ひやられて、夢に見ゆらむとそら恐ろしくつつまし。（帚木① 103-104）
- 4 人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおほゆ。（賢木② 105）
- 5 命さへ心になはず、たぐひなきいみじき目を見るはといと心憂き中にも、知らぬ人に具して、さる道の歩きをしたらんよとそら恐ろしくおほゆ。（手習⑥ 324）
- 6 さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。（若菜下④ 239）
- 7 次例も同質の表現であると考えられる。
「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおほしまさば」（須磨② 179）
- 8 女、いかで見えたてまつらむとすらんと、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひ

やるなん、いみじう心憂き。(浮舟⑥¹⁴²)

右例7・8は、「そら」と形容詞の間に助詞「も」「さへ」が挿入され、「そら」は名詞である。語の関係も「そらについても恐ろしい」「そらまでもが気が引けて、恐ろしい」という、「そら」の性質・在り方を規定する表現であることから、「そら」と形容詞は主語・述語の関係にある。右と同質の表現である「そら恐ろし」「そら恥づかし」においても、主語・述語関係と捉えることができる。よって「そら+形容詞」の「そら」も、実質的概念を表す名詞として扱うことに従いたい。『岩波古語辞典』(一九七四年)では、「そら」は「天と地の間の空漠とした広がり・空間。アマ・アメ(天)が天界をさし、神神の国」という意味をこめていたのに対し、何にも属さず、何ものもうちに含まない部分の意」と捉えている。

用例を見ていこう。例1は、藤壺懷妊を喜ぶ桐壺帝の御使いなどが度々三条邸を訪れるが、それにつけても藤壺は「そら」への恐懼に駆り立てられ、常に物思いが絶えないことをいう。2は、東宮が源氏そっくりに成長していくことを玉の瑕とすら思っている藤壺は、源氏・東宮の失脚を狙う弘徽殿・右大臣専横の世において、秘密が暴かれるのではないかとという危惧を抱いており、露見によって身に降りかかる困難に心を労すること「そら恐ろし」く思われるのである。

3は紀伊守邸に方違えに訪れた源氏と一夜を契ってしまった空蟬が、日頃は気に入らないと侮っている夫伊予介が夢に見るのではないかと「そら恐ろしく」思い、身を慎み用心するのである。4は尚侍として出仕した朧月夜と今も関係を続けてい

る源氏が、里下がりした朧月夜と密会する場面で、源氏は「端近」であることを「そら恐ろし」と思っている。¹⁴³5は入水自殺から蘇生した浮舟が妹尼から初瀬詣でを誘われると、靈験もななくこのような身になった上に、親しくもない人との物語での道中に対して「そら恐ろしく」思うのである。

6は女三宮と通じてしまった柏木の心内表現であるが、「いみじき過ちしつる身」が「世」にあることの「まばゆ」さが「恐ろし」「そら恥づかし」に繋がっている。柏木は「そら」に対して「恥づかし」と捉えているが、川村佐和氏は柏木の源氏や「そら」への「恥づかし」の意識が死に繋がると論じておられる。「そら」への恐懼や引け目を感じる上で、「いみじき過ちしつる」という、我が身が重大な過失を犯したという認識が基底にある。

7は、須磨への流離を決めた源氏が別れの挨拶に藤壺を訪れた場面である。源氏は自分が須磨へ流離するという「罪」に当たったのは、「思うたまへあはすること」即ち密通・若宮誕生という、ただ一つのことにと拠る客観的に当然のことと判断している。未だ密通・不義の子の事実の露見はない。しかし「そら」は見通しており、罰としての須磨退去を招来したと考えるから「恐ろし」なのである。それ故にこそ源氏は「惜しげなき身は亡きになしても」と、我が身の破滅はよしとしても、ひたすら東宮即位への安泰を願い、須磨へと退去して行く。浮舟例8の「そらさへ」は、薫に対面することを、薫は当然のこととして、その上に「そら」への畏怖が添加されている。

ところで、これらの畏怖し引け目を感じる「そら」を具象化

した表現として、

9 かかることは、あり終れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおほえしを…(若菜下④ 257-258)

がある。「かかること」は柏木の女三宮への密通を指し、ここでも柏木は自分の犯した「いみじき過ち」の露頭を恐れ、「つつまし」と身を憚り、空に付いた「目」を恐れている。

また、右例9と照応する表現が「天の眼」である。

10 「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば…」(薄雲② 449-450)

これは藤壺の代から仕えてきた僧都が、「物のさとししげく」「天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひあ」(薄雲② 450)の天変や、左大臣・藤壺の相次ぐ逝去は、冷泉帝が源氏が実父であることを知らない故の変事であると、冷泉帝に告げる場面である。この「天の眼」は、青表紙本系では「天のまなこ」であるが、河内本系では「天眼の」、青表紙大島本も「天けん」に「天眼ナリ」と傍書しており、仏典に見られる「五眼」の一つ「天眼」に当たる表現である。

仏教語「天眼」は、「法華経」法師功德品にも「其中諸衆生一切皆悉見 雖未得天眼 肉眼力如是」とある、天界の仏が持つ、遠近内外昼夜を問わず自在に物事を見ることのできる「一切皆悉見」の眼である。鬼束隆昭氏は、仏教語の「天眼」には恐懼に繋がる認識はないことから、中国の「天の思想」と

の関連において、「天」と「そら」は同義の認識であろうことを述べられた。出自は仏教語や中国思想にあるとしても、例10の「天の眼」は、あらゆることを見通す目であることによつて、僧都の恐懼を引き起こしていることに間違いない。

右例の「罪重くて」の主体を帝、或いは僧都とする二解がある。ここでは僧都は、帝に真実を告げることが自分の罪に当たるのではないかと捉えており、「冷泉帝が事実を」知ろしめさぬに罪重くて、(私は)天の眼恐ろしく思ひたまへらるる」のである。しかし、まさに「物のさとし」として「天変」が起きている今、僧都の罪としても「天の眼」が恐ろしく感じられるのであり、僧都は「仏天の告げ」として真実の告白を決意したのである。

右例1-9において「そら」に近接する語は、形容詞「恐ろし」「恥づかし」「つつまし」の三語である。また「そら」を恐懼し、引け目を感じる人物は、源氏・藤壺・柏木・浮舟(各2例)・空蟬(1例)という、いずれも密通を犯した人々である。それが望んだものであれ、望まずしてであったにしても、結果として密通を犯した人々の意識に浮かび上がってくるものが「そら」である。源氏物語における「そら」に関わる恐懼とは、「いみじき過ちしたる」人々が、「そら」からのすべてを見通す「目」に見据えられることによつて、おのが罪を指弾され、罰せられるのだという認識において、「そら」を畏怖し、引け目や身の憚りを感じるのである。

しかも藤田加代氏は、「そら」による「恐ろし」の罪意識とは、動詞「おそふ」「おそる」などと同根の意義的単位「おそ

の持つ「危害を加え」られることによるものであり、「内省」ではなく「己の罪に『そら』の力が下される、その恐怖を介した罪の自覚である」と論じ、近年(注9)にも、「恐ろし」は「圧殺するかのよう襲撃してくる威力に対して抱く、畏怖・畏懼の心情表現」と説明しておられる。こうした「恐ろし」の語義把握によって、より明確に恐懼の実体を捉えることが可能になる。

二 神や魂の飛翔する「そら」について

ところで源氏物語において、このような恐懼を生み出す「そら」空間はどのように描かれているのだろうか。次にその点を考えてみたい。源氏物語中の名詞「そら」226例は、

I 自然現象として、雨・雪が降り、雲がたなびき、霧が立ち、霞がかかるなど、天候が提示され、月・星が出、煙が上り、鳥が飛ぶ空間

II 人事との関わりにおいて、①神が居り、荒ぶる魂や亡き御魂、幻術士が跳梁し、目が付いている空間 ②亡き人や恋しい人を慕って「ながむ」空間 ③人の心が浮遊する空間 ④人々の心や行動を示唆する空間

として描かれており、藤田氏が説かれるように、本来「そら」は「内実のない広がり」を捉えるのであるから、雲であれ、雨であれ、神や人の心にしても、さまざまなものが入り込み、立ち現れることの可能な空間であったことがわかる。

ここではII①の「そら」空間を検討していきたい。

11 春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思し

て、「神など」空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」

(紅葉賀① 312)

12 国(注10)つ神空にことわるなかならばなほざりことをまづやたださむ (賢木② 92)

13 なげきわび空に乱るる わが魂を結びとどめよしたがひのつま (葵④ 40)

14 降りみだれひまなき空に「ききひと」の天かけるらむ宿ぞかなしき (落標② 315)

15 大空をかよふ まぼろし 夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ (幻④ 545)

例11・12は、「そら」にいる神が恐れられた理由を明確に示す例である。11は、幼い雅明親王が見事な舞を舞ったため神隠しに遭い亡くなったとする『大鏡』の「山の神めでてとりたてまつり給てしぞかし」の記事と照応する叙述である。源氏の見事な青海波の舞を見た弘徽殿女御は、神などが空から魅入るのではないかと、不吉な予感を抱いているが、神はあまりに優れたものを手に入れるためには、取り殺したり、神隠しにするなど、不吉な恐ろしい存在でもあった。それは、宇治の院で入水した浮舟を発見した横川僧都一行がその正体を見顕わそうとして、「鬼か、神か、狐か、木霊か」(手習⑥ 885)「鬼にも神にも領ぜられ」(同⑥ 885)と言っているように、神も鬼・狐・木霊と等質の禍々しさをその属性として持つものであった。12は伊勢に下向する斎宮から源氏への返歌であるが、「国つ神」は「(理非・正邪の)判断を下す」「理非を究明し、罪過の有無を取り調べる」存在(注11)として詠まれている。

源氏物語中「神」は31例、「住吉の神」8例「鏡の神」はもりの神」各2例「葛城の神」「ただすの神」「春日の神」「国つ神」「国つ御神」「たむけの神」各1例などが見られ、「ただすの神」は理非や罪過を「糺す」に掛けて和歌に詠まれることも多い。

- 16 くやしくぞつみをかしけるあふひ草 **神**のゆるせるかざしならぬに(若菜下④ 232)
- 17 わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき伸と **神**やいさめし(総合② 370)
- 18 うき世をば今ぞ別るとどまらむ名をば **ただすの神**にまかせて(須磨② 181)
- 19 いかにしていか知らましいつはりを空に **ただすの神**なかりせば(枕草子、一八四段)
- 20 人しれず心 **ただすの神**ならば思ふ心を空にしらなん(篁集、二)
- 21 あひ見むと思ふころはまつらなる **かがみの神**やそらに見るらむ(紫式部集、18)
- 例16は柏木が「神のゆるし」しなき女三宮との関係は「罪」を「犯し」たと後悔し、17は朱雀院が斎宮の伊勢下向の際別の櫛を挿したため、神は前斎宮に近づくことを禁止したのかと嘆く歌である。18・20は、「ただす」と「ただすの神」を掛け、21は「鏡」と「見る」を縁語として「かがみの神」が詠まれている。神は人々に対して「ことわり」「ただし」「ゆるし」「いさむ」など人倫を裁くという面があり、神の「ことわり」「ただし」「いさむ」行為は、心に咎ある人々にとって恐ろしいこと

とであつたと思われる。例7の源氏が「罪に当た」つたと思うのも、具体的にはこのような「それ」の神が人倫を裁くことによつてもたらされた罰であるという認識によるのであろう。

ところが、11・12について小山敦子氏は「空に」は空間の意ではなく、「暗に」の意であるとされた。源氏物語中「それ」の形では、「それに通ふ」「それにめぐ」「それにことわる」「それに；推しはかる」「それにさとる」「それにくもる」「それに焚く」「それに天翔ける」「それに乱る」「それらにのみ思ほしほる」など、全27例ある。

22 それしかあらじと、それらに **かがみ**はかり思ひくたさむ。(帚木① 57)

23 さらに、しろしめすべきことはいかでか **それらに**さとりはべらむ。(夢浮橋⑥ 377)

右は疑問・反語表現の「いかがは」「いかでか」を伴い「おしはかる」「さとる」と呼応する「それら」例である。しかしこれらも副詞というよりは、名詞「それ」の「実体的ない・内実のない」意の副詞的用法であると考えられる。22は頭中将、23は横川僧都の発話中に見られるもので、「推しはかり」「さとる」主体は神ではない。人が実体的ないままに、内実を知らないで推測し、理解することを表している。神々が「それら」→する例である11・12・19・21においては、神が実体を知らないで根拠もなく源氏を愛するはずもなく、当て推量に裁定する神であれば、その神が畏怖されたり、信頼されるはずもないであろう。よつて、掛詞の用法例を含むとしても、まずは神は上空に広がる、空漠とした「それら」空間において人間社会を見、人倫

を裁くと認識されていたと思うのである。

次に例13は、葵の上に取り憑いた六条御息所の生霊が、我が身を抜け出て空に彷徨う魂を結び留めてほしいと源氏に哀願する歌である。この「乱るる」魂が葵の上を取り殺すと物語は語るのであるから、生き御魂の跳梁する「そら」も恐懼に繋がる空間である。14は六条御息所の逝去後源氏が前斎宮に贈った歌であるが、「天翔る」の語は源氏物語中4例ある。若菜下巻では成仏できず、物の怪となった六条御息所が「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど」(④²³)と源氏に語る例や、この世に心を遺す宇治の八宮と大君の亡き魂が「天翔り」て娘や妹を見る例が各1例で、「天翔る」4例すべてが亡き人の魂が跳梁することを表現し、古代的な亡魂の浮遊するイメージを揺曳している。「そら」は身体を遊離した「乱るる」生き御魂や、この世に心を遺し「天翔る」亡き人の魂が跳梁する空間でもあった。

例15は「大空」例であるが、源氏は亡くなった紫の上が夢にさえ現れないのを嘆き、幻術士に魂の行方を捜してほしいと願う歌意である。『長恨歌』に見られる、「方士」が亡魂を捜し求める「排空馭氣奔如電 昇天入地求之遍(空を排き氣を馭りて奔ること電の如し 天に昇り地に入りて之を求むること遍し)」の表現を踏まえ、桐壺帝の桐壺更衣追慕の「たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」(桐壺①³³)歌とも響き合っている。亡魂を捜す「まぼろし」である幻術士もまた「そら」を跳梁していた。

かくて、藤田氏が指摘された「内実のない」「そら」である

故に「さまざまなもの」が浮遊するところである源氏物語の「そら」には、人倫を裁き、不吉な神や荒ぶる生き御魂、跳梁する亡き御魂、幻術士が「さまざまなもの」の内実として描かれている。しかもそれらは、人を裁き、取り殺したり、取り憑くなど、人々を「おそ」うように働きかけてくるものでもあった。

三 古事記・万葉集・日本書紀における

「そら」について

源氏物語に描かれた神や魂、幻術士の跳梁する「そら」が源氏物語を嚆矢とするであろうことを、藤田氏は次のようにも述べておられる。

しかるに奈良朝の作品にみられる「そら」は、例えば万葉集において「かりがねの聞こゆる空」であり、「月渡る(立ち渡る)空」であって、そこでは魂が浮遊したり神が横行したりする「そら」は描かれない。

古事記や万葉集・日本書紀においては、神や魂が「そら」を飛び、行き交うと描かれることはないであろうか。

まず古事記においては、「あま・あめ」は神名、天上の神話世界に関するものに「あまの・あめの」を冠して用いられるなど約330例あり、「そら」は神名、人名など6例「そらみつ」3例「あめのみそら」1例がある。

24 是に、八尋の白ち鳥と化り、天に翔りて、浜に向かひて飛び行きき。…亦、其地より更に天に翔りて飛び行き

き。(中巻)

25 天飛ぶ 鳥も使ひそ 鶴が音の 聞えむ時は 我が名

問はさね (下巻)

26 浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな (中巻)

27 吾が心、恒に虚より翔り行かむと念ふ。(中巻)

「あま・あめ」は神によって統制された神話世界を形成する概念として用いられたのに対し、「そら」は人間社会に接するところで捉えられた概念であるとされる。益田勝実氏は、古代「アメーソラーツチの三層構造の神話的世界像」を抱いた人々は、「高い山の頂をソラ」と捉えており、「日本人の考えてきたソラは、無限に高いかなたではなかった」と述べておられる。しかしこれも、高いか低いかによって区分されるといふよりは、「天地」の間にある「何にも属さず、何ものもうちに含まない」「内実がないところ」という認識において「そら」と捉えられたものであろう。「空」「虚」「虚空」などの表記は、内実のない意を言語化するものであったと思う。

例26・27の「そら」は、地上対空中を対置させることにおいて認識する人間世界に属する空間であるが、24・25の「あま・あめ」は、白千鳥となった倭建命の魂が翔り行くのは、人間世界とは懸隔のある、神によって統制される世界であることを表している。日本書紀でも白鳥となった日本武尊の魂は「遂に高く翔びて天に上りぬ」(景行紀)とある。

万葉集でも「あま・あめ」関連語は約330例あるが、「そら」は28例「みそら」6例「大空」1例「あまつそら」1例「あまつみそら(あめのみそら)」3例である。中でも次例は、

神や亡き魂を詠む歌とされている。

28 : 海原の 辺にも奥にも 神づまり 領き坐す 諸の

大御神たち 船舳に 導き申し 天地の 大御神たち

倭の 大國靈 ひさかたの 天の御空ゆ (阿麻能見虚

諭) 天翔り、見渡し給ひ… (巻五 88b)

29 鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るら

む(巻二 126)

30 青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬ

かも(同 126)

山上憶良作「好去好来歌」にある例28は、海の神々が舳先に立ち船を安全に先導し、天地の神、特に「倭の大國靈」は「天の御空」を飛翔しながら遣唐使の人々を見守るといふ。神々は、神話世界の「天の御空」に位置して「天翔」っているのであり、源氏物語のような恐懼に結びつく「そら」ではない。29は未だ「鳥翔成」に定訓のない歌で、「アマガケリ」と訓めば、亡き魂と「天翔る」が照応する例となるが、記紀の倭建命が白い鳥となつて飛翔する例と照応させ、「トリトナリ」と訓む解釈もある。古代亡き魂は鳥となつて飛翔すると考えられており、西郷信綱氏は30の「かよふ」も鳥となつた天智天皇の魂が遊行する様を幻視した歌と解しておられる。亡き有間皇子の魂や、亡き天智天皇の御魂が往来する空間は、それが「あま・あめ」か「そら」かは明確に表現されていないが、倭建命が白千鳥となり飛び行く「天翔る」空間と同じであったことは確かであろう。

かくて、古事記・万葉集では、源氏物語のように「そら」そ

のものに神や亡き御魂が浮遊するとは表現されていないし、ましてや「そら」を恐懼するという認識は見られない。ただし万葉集の「心空なり土は踏めども」（巻一 254）と「わが心天つ空なり土は踏めども」（巻二 288）は同表現となり、「天つみそらに照る月」（巻二 300）も歌の表現としては「あま・あめ」の実体を失い美化傾向を示していると言えるのではないだろうか。

ところで日本書紀においてはどのように描かれているのだろうか。戸谷高明氏は二つのソラがあると把握された。「現実的な空間」と「画像を映すスクリーンのように、超現実的な事象を映し出し語ることでできる空間」である。前者は鳥などの飛ぶ空間であり、後者は神代紀において神が誕生し、神武紀・崇神紀・皇極紀・斉明紀では、次のような「神話的超現実的な奇蹟の起り得る一つの世界」として語られる空間である。

31 饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行きて、是の郷を睨りて降りたまふに及至りて、故、因りて目けて、〔虚空見つ〕日本の国」と曰ふ。（神武紀三一年）

32 時に、〔五つの色の幡蓋、種種の伎楽〕空に照灼りて、寺に臨み垂れり。衆人仰ぎ観、稱嘆きて、遂に入鹿に指し示す。其の幡蓋等、変りて黒き雲に為りぬ。（皇極紀二年）

33 夏五月の庚午の朔に、空中にして〔龍に乗れる者〕有り。貌、唐人に似たり。青き油の笠を着て、葛城嶺より、馳せて膽駒山に隠れぬ。…（斉明紀元年）

『大系』では右例をはじめ「空・空中・太虚・大虚・虚空・

虚・虚天」などを「そら」「おほぞら」と訓じている。例31は、

「そらみつ」を空から見た意とする語源説話を記すものである。「饒速日命」は「天神の子」であり、「天磐船」に乗って天空を飛翔すること自体「神話的」と言える。32は山背大兄王が自死した際「空」に立ち現れた不可思議な事象を語っている。寺の上空に出現した五色の幡や蓋、妙なる舞楽は、それを蘇我入鹿が見ると「黒き雲」に変じたとある。33の「空」に現れた「龍に乗れる者」は葛城山・生駒山・住吉を経て西に「馳せ去ぬ」とある。平安末期の『扶桑略記』はこれを「時人言、蘇我豊浦大臣之靈也」と記しているし、『大系』によれば「住吉大社神代記」では、これを住吉大神の神域巡検と説いていると言う。また32についても、『扶桑略記』には「一説云」として、「魂遊蒼昊之上」という記述があり、この「魂」は亡き山背大兄王の魂を指すと読むことができる。日本書紀には見られず『扶桑略記』において見られる「靈」「魂」の記述には、平安後期の認識が含まれているであろうし、平安中期の『政事要略』にも「高橋氏文」の宣命に、亡き六鴈命の魂を「虚ッ御魂」と記述する例があり、平安時代の靈魂に対する認識が投影されているように思う。

日本書紀において「神話的超現実的」事象が立ち現れるのは「空」であるが、それもやはり源氏物語における「目」の付いた、人倫を裁く恐懼の「そら」という認識とは異なる。しかし、この超現実的事象を見せる「空」には、様々なものの入り込む多様な「そら」空間〔土壌〕が、既に源氏物語以前の時代にもあったことを知るのである。

おわりに

松尾氏は「そら恐ろし」は「空^二天^一」（造物主・神・仏）の「目」が恐ろしいと感じる罪意識を表す語であるという卓見を示され、藤田氏は元来「そら」は「すべての現実的実体に対して、それから離れて存在する」「何にも属さず、何ものもうちに含まない」ところである故に、源氏物語世界においては「さまざまの『もの』が浮遊し、わざをするところであり、とりまき瀟漫しながら人を監視し人を『おそ』うところ」であると捉えられた。ここではそれらの論考に拠りながら、こうした「そら」の「目」意識を倫理観と言ってしまうのでは正確に把握できない、源氏物語世界に即した人々の具体的・即物的畏怖の内実を検討してきた。

紫式部の描き出した恐懼の「そら」には、人倫を「ことわり」「ただし」「ゆるし」「いさむ」神や身体を遊離した「乱るる」生き御魂、「天翔る」亡き御魂、幻術士などが跳梁していた。人々は密通という人倫に反した行為を犯したが故に、「目」の付いた「そら」に畏怖し、引け目を感じ、身を憚り、罪の意識を抱いた。しかもそれは、「天の眼」とも表現される、仏教語の「天眼」と繋がる超人的な「目」であり、それがすべてを見通していて罰を下すと考えたのであった。こうした「そら」は、人々の上に際限なく広がる空間であることにおいて、力の威圧としての恐懼となるのであった。

例1において、帝への背信行為を犯した藤壺は、帝の御使い

が途切れることなく訪問することさえも一つの契機として、「そら」の「目」にはすべてを見通されており、今にも我が身や我が子に罰として下される裁きがあると思ひ、恐懼を募らせた。

例2では、源氏そっくりに成長していく東宮を見るにつけ、藤壺にはそのことが光り輝く玉である東宮の瑕とすら思われる。「そら」の「目」にはすべての秘事を見通されており、いざれ罰として「世のわづらはしさ」が招来されるであろう。源氏との不実の露見によってもたらされる「世のわづらはしさ」は、我が身のみならず、源氏、若宮、帝までも失墜させてしまう「致命的な」威力を持つものである。源氏と東宮の容貌の相似すら、東宮・源氏失脚を画策する弘徽殿・右大臣方による秘事暴露の端緒となりかねないことを懸念する藤壺の恐懼は、誰かに見られているというのではなく、人々を取り巻き覆って、すべてを見通し、罰を下す「そら」そのものに対してであった。

密通者達が「そら」を恐懼したのは、「そら」の「目」に見通されることによつて今後下される身の破綻を恐れたからである。そのため人々は身を慎み、用心をするのであるが、第一部の藤壺と源氏は、出家し、須磨に退去することによって破綻を回避し得た。第二部の柏木は、「そら」の「目」と源氏の視線^{（注20）}に恐懼を自己増殖させ、病死した。第三部の浮舟は、入水自殺・出家を経て再生していく。源氏物語においてこうした人倫上の罪を犯した人々の意識を形象化し、言語化したのが「そら」に関わる恐懼の表現であった。

注1

「源氏物語における罪の問題―序説・藤壺の場合―」(『国語と国文学』35―3昭和33年3月) 山田清市「源氏物語に表われた罪の意識」(『国文学解釈と教材の研究』3―5昭和33年4月) 木船重昭「わが罪の程おそろしう……」――『藤壺の宮像修復論』の補遺と発展と――」(『平安文学研究』第四十四輯昭和45年6月)

2 用例は「源氏物語」[古事記]は「新編日本古典文学全集」、
「枕草子」「万葉集」「日本書紀」は「日本古典文学大系」、
「策集」「紫式部集」は「新編国歌大観」(漢字に改めた箇所がある)、「扶桑略記」「政事要略」は「新訂増補国史大系」に拠った。上記を「新全集」「大系」、「新日本古典文学大系」を「新大系」と略称。

3 「「そら恐ろし」の語意について」(『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』昭和59年10月)

4 「源氏物語注釈一」(平成11年7月風間書房)により「伊予の方のみ」を「伊予の方」と訂した。

5 「おぼゆ」と敬語表現ではないところから、「そら恐ろし」を源氏を引き入れた女房の心情と解する『源氏物語湖月抄』
「大系」もあるが、臘月夜との密会が源氏の須磨退去の直接原因となること、手引きする女房の罪意識が語られた例はないことから、源氏においてこそ喚起される恐懼である。

6 「源氏物語における「空」意識と密通」(『國學院大学大学院文学研究科論集』13昭和61年3月)

7 「源氏物語における密通事件の応報について―『史記』の因果観からの照射」(『宮城学院女子大学日本文学ノート』

第23号昭和63年1月)

8 「源氏物語における「そら恐ろし」について――日本語「そら」の考察を基盤にした語義把握――」(『高知女子大学保育短期大学部紀要』第9号昭和60年5月)

9 「源氏物語における「おそろし」について――光源氏造型と密着させながら――」(『日本文学研究』第四十号平成15年3月)

10 「大鏡」第六卷大井川の行幸(延長四年十月一九日)。

11 「岩波古語辞典」「ことわり」「ただし」の項に拠る。

12 「形の類似から生ずる古語の誤解―解釈史の展開(二)(源氏物語語彙より)―」(『国語と国文学昭和32年11月) 神名に「天津(あまつ)日高」に対する「虚空津(そらつ)日高」など、「空・虚・虚空」を「そら」と訓み、本州を別名「天御虚空(あめのみそら)豊秋津根別」と言う。

13 本居宣長は「天は虚空の上在て、天神たちの坐ます御国なり」(『古事記伝』)と捉えている。

14 「そらみつ大和」(『国語通信』第二〇二号昭和52年12月)「夢の浮橋のイメージ」(『日本文学』27―2昭和53年2月)「トリハナス」「アマガケリ」「ツバサナス」「トリトナリ」など多数の訓がある。間宮厚司氏は「万葉難訓歌の研究」

15 第四章 一四五番歌の訓解(平成13年4月)において「トリトナリ」説を推しておられる。「大系」補注、西郷信綱『古事記研究』「ヤマトタケルの物語」(昭和48年7月)でも、上代の人々には死して魂が鳥となるという認識があったと説く。

16 西郷信綱『古代人と夢』第五章 古代人の眼(平成5年6月)

18

『古代文学の天と日―その思想と表現―』第三篇第一章
古代文学における「空」の表現（平成元年4月）

19

例32の事象は「黒き雲」に変じたところ、平安時代には
含む。源氏物語では語られることはないが、平安時代には
『日本往生極楽記』などの往生伝において、往生の瑞祥と
して伎楽や音楽・薫香などが空に現れると描かれている。

20

柏木は女三宮に通じた後、「しかいぢるき罪には当たら
ずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと
恐ろしく恥づかしくおほゆ」（若菜下④ 283⑤）「あさましく
おほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目
をも見あはせてまつらむ」（同④ 283⑥）と源氏の視線を
恐れている。この点については、注6の川村氏などが触れ
ておられる。

（やまざき かずこ・博士後期課程二年）